

◆ E s s a y ◆

僕らの世界にとって「かけがえのないもの」とは何か ～ジャーナリスト・堤 未果氏の著作を通して考える～

結城 俊哉
(福祉学科教員)

はじめに

2001年9月11日、アメリカ・ニューヨークの朝、ハイジャック旅客機に突っ込まれ崩れ落ちるツインタワー（世界貿易センタービル）、隣の世界金融センタービルに居合わせ、リアルタイムにその現場を目撃したという「悪夢」の中から、堤未果というジャーナリストは誕生した。

その後、「テロとの戦い」を合言葉に、「大量破壊兵器（＝実は存在しなかった）を隠し持っている」という疑惑を信じ込んだ大国アメリカは、報復のためのイラク戦争へと暴走を始めたのだった。今回、書評エッセイの素材は、彼女の原点とも言える『報道が教えてくれないアメリカ弱者革命～なぜあの国にまだ希望があるのか～』（海鳴社、2006年）（以下、『アメリカ弱者革命』と略す）と『もうひとつの核なき世界』（小学館文庫、2014年）（以下、『核なき世界』と略す）の2冊を中心に、彼女がアメリカの市井の人々との出会いを手がかりに丁寧に貴重な取材（インタビュー）を積み重ねながら指し示す、僕らの世界の「かけがえのないもの」のあり方について考えてみたいと思う。

2015年の夏、僕は日陰を探しながら街中を歩いていた。重いリュックの中に、最近はいつも何冊か彼女の本を入れて持ち歩くことが習慣となっているため、背中中は汗でびしょりだ。僕は、横断歩道を渡った向かい側にあったスターバックスに立ち寄り、注文したアイス・ラテを片手に、早速、葉を挟んでおいた、堤未果著『アメリカ弱者革命』の続きを読み始めた。

I. 『報道が教えてくれないアメリカ弱者革命～なぜあの国にまだ希望があるのか～: Revolution of The Weak behind The News – Why America still has Hope –』(海鳴社, 2006年)

この本のタイトルは、とても不思議だ。「報道が教えてくれない…」とわざわざ書いてある。僕は、何か隠されている秘密を暴露する意図のある本のような印象を抱きつつ、胸の中には、奇妙な違和感がざわついた。戦後70年間、国民を国の主権者とする民主主義の平和国家として歩み、日本国憲法9条で「戦争を完全放棄したはずの日本」だと僕は信じてきた。しかし、昨今の新聞やテレビ等のマスメディアからの情報だと、国会審議中に、国会に召喚された3人の憲法学者が、その場で「違憲だと判断されます」と明言された「集団的自衛権」を中心とする「安全保障関連法案(=内容は、「戦争法案」でしょ!)」によって、終戦記念日(8月15日)を前にして、日本社会の何かが揺れている様な確かな感覚に捉えられた。そして「思想・表現(=報道)の自由」が憲法21条で保障されているはずの日本に向けて、自由の大国アメリカでは、リアルな現実が自由に報道されないメディアの中に何か秘密が隠されているということなのか?

この本の衝撃は、プロローグの中にそのエッセンスを感じ取ることができる。彼女は、ジャーナリストとしてさまざまな直面する困難に抗いながら「アメリカン・ドリーム(夢)」の実現をめざす自由と希望のアメリカという大国の中に埋め込まれている現実とそこから見えてくる真実を正確に「まずは、行動すること、知ること、伝えること」を通して、日本で今を生きる僕たちに取材を通して静かにそして熱く語りかけてくる。僕らは、彼女からのメッセージを受け止めることで自分の中で何かが変わり、そして、この国の社会を変えていく「希望と自由とそして未来」をしっかりと自らの手の中に発見し、手放さない勇気を得ることができるのではないかと感じた。

詳細な内容は直接、彼女の著作を読んで頂くしかないが、ここで取り上げた2冊の本から、僕なりに「感じたこと、知ったこと、考えたこと、驚いたこと、悩んだこと…等々」を書き止めておきたい。彼女から学んだことは、一言で言えば現実の本質を見抜けない「無知であることの恐怖」であった。

まずは『アメリカ弱者革命』からだ。この本の出だしは、彼女の取材を受けた弁護士の語りから始まる。以下にそのプロローグからの抜粋を紹介してみよう(以下…は中略の意味)。

世界の富の四分の一を所有するこのアメリカでは、3,100万人の国民が飢えているんだ。……君の国日本でも、カード破産って聞いたことあるだろう?……こっちは高すぎる医療費が払えなくての破産だ。だって、医療保険に入っていない国民が4,500万人もいるからね。若者の借金もハンパじゃない。日本では大学に

行かないフリーターが増えているんだって？こっちの若者は大学に行きたくてうずうずしているんだ。大学に行かないと貧困から抜けられない社会だから。……でも、大学の授業料は年々値上がりするのに政府が奨学金の枠を縮小するものだから、みんな仕方なく大学への支払いにクレジットカードを使うんだよ。……9.11のテロ以来、みんな恐怖に取りつかれて武器を買いあさったから、今、国内にはざっと2億3,000万丁の銃がある。それで、その銃で、一日平均13人の子どもが死んでいるんだ。2003年3月に開始されその年の5月に終了宣言したのに、政府が理由をつけて、今もぐずぐずと兵士を駐留させているイラク戦争。あの戦争に使った費用は、2005年11月の時点で2,500億ドルだ。すごい金だろう？これだけあれば、7,428万人の若者を4年制の大学にやれるんだぜ。けど、代わりに軍は、入隊すれば大学費用を出してやるって言って、貧しい高校生達をリクルートした。実際、軍に入ったら、いろんなからくりがあって、ほんとうに大学にいける兵士なんて全体の35パーセント、卒業できるのはわずか15パーセントだけだね。

こんなはずじゃなかったとあわてても、もう手遅れで、気がついたらM-66を手にして砂漠の真ん中でターバンを巻いた連中に発砲しているわけさ。……2005年の10月の時点で発表された米兵死者は2,200人だけど、万が一生きのびて帰国できて誰も面倒なんかみてくれない。帰国後PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しむ兵士は多いけど、予算カットで人手不足の軍病院は予約もとれないありさまだ。ほとんどの兵士と同じで、PTSDのせいでまともに社会に戻れずに、今、国内にいる350万人のホームレスの一人に加わるのがオチだ。……一握りの富める者たちが、それ以外の人間全部を下へ下へと押しつぶして苦しめながら、海の方こうで戦争を続け、さらに金を儲けるようになっているんだ。[堤未果（2006）pp.7-10]

僕は、この出だしを読みながらアメリカという国について報道されている事実とその現実についてほとんど何も知らないことに愕然とした。僕らの中に、アメリカで制作されたベトナム戦争やイラク戦争等をテーマとした代表的な映画作品として知られる「7月4日に生まれて」、「プラトーン」、「地獄の黙示録」、や「ハート・ロッカー」、最近では、「グリーン・ゾーン」、「アメリカン・スナイパー」「ドローン・オブ・ウォー」等々を鑑賞したことがあるだろうか。しかし、それぞれの映画作品は、確かに戦争に対するさまざまな視点から描かれながら、戦争という狂気が駆け巡る舞台の中で生きることを余儀なくされた兵士達の姿や描かれ方に僕は、「奇妙な温度差」を感じていた。

その奇妙な温度差の正体は何だろう。僕は、『アメリカ弱者革命』を読みながら、その謎が次第に解けていく実感を覚えた。

つまり、僕の抱いた奇妙な温度差の正体は、貧困からの脱出方法としての戦争、

戦場におけるストレスによる帰還兵のPTSDやうつ病、自殺問題までも含めて、99%の貧困弱者を食い物にして肥大化する1%の富裕層で成立しているのが『貧困大国アメリカ』の正体なのだと彼女が明言して、はばからない恐ろしい程メディアが報道しない暗部（ダークサイド）が徐々に明らかにされてくることの中にあつた。

そして、さらに、この本の次のような記述を読んだ瞬間、僕の意識は一瞬フリーズした。なぜなら、この記述は、インターネットの普及が戦争への危険なパンドラの箱の蓋を開くのだとも言えるリアルで恐ろしい現実の一端を教えてくれたからだ。

イラクでの犠牲者が増えつづける一方で、陸軍のオンラインゲーム『アメリカズ・アーミー（アメリカの兵士達）』の利用者は、毎日平均3,000人から4,000人にのぼる。

このゲームは、誰でもオンライン上から無料でダウンロードできる。ビジュアルな戦場で、リアルな戦闘を体験するビデオゲームだ。ユーザーは登録の際、ユーザーネームと電子メールのアドレスを打ちこむことになっている。すると自動的にどこかのパソコンから登録が行われたのが瞬時に調べ出され、住所などの情報がアメリカ軍のデータに記録される仕組みになっている。

2003年の11月に登場した『アメリカズ・アーミーその2』が出てからは、オンライン登録者の数は200万人を超えた。「記録によると、10月末のある夜などは、全世界で約130万人のユーザーがこのゲームで遊んでいたことがわかる。オンラインゲームは、軍のリクルート手段としては、今の時代に合わせたかなり有効な方法ですよ」アメリカズ・アーミーのプロジェクトチームの一人であるコリン・ワーディンスキー氏はそう語る。……

「アメリカズ・アーミーというゲームは、問題が起こったときに暴力で解決するのが正しいというふうに、子どもたちを洗脳するのです。爆音とともに敵の体が真っ赤なばらばらの破片になって辺りに飛び散る映像も、回を重ねるごとに何とも思わなくなってくる。こどもたちの感覚を麻痺させて『殺し』に関する正常な判断力を徐々に壊していくんです」……

グラフィックのリアルな映像は、全米のゲームソフト会社から賞賛を浴びている。たとえば、マシンガンの映像ひとつとってみても、他者のゲームソフトに比べてその使用行程や特徴が実物に極力近い形で表現されている。そして、アメリカ軍は、『アメリカズ・アーミー』の内容を頻繁に更新することも忘れない。それによって、軍で実際に行われている最新の訓練を子どもたちに疑似体験してもらうためだ。

ユーザーの情報は、登録時だけでなく、その後も引き続き軍に送られるため、

軍は常にそのユーザーがどこまでのレベルに到達しているかも把握できる仕組みになっている。[堤未果 (2006) pp. 194-197]

ここまで読んで、僕は、彼女が暴き出すアメリカ軍のビデオゲームによる子供達への刷り込み（インプリンティング）効果を狙ったマインド・コントロールのような手法を使う「徴兵リクルート」の基盤作りの現実を知った瞬間、そのリアリティに背筋が凍った。

「貧困ビジネス」と並んで「戦争ビジネス」という言葉を聞いたこともあるだろうか。

ホームレスの人を対象にした貧困層や若者のワーキングプア層の人々を狙った生活保護費のピンハネや収奪を狙う「貧困ビジネス」には鈍感だが、「生活保護費の不正受給問題と福祉事務所バッシング」には過剰反応する日本のマスコミ報道がある。一方、同じ人間同士が殺し合うことで「生命（いのち）や精神（こころ）」を破壊し、人間の「夢や希望」を剥奪する戦争で商売をするビジネスを「戦争ビジネス」と呼ぶが、日本のマスコミは自主規制しているような報道ばかりで反応は鈍いままだ。そして、マスコミ関係者は当然知っているのだろう、「戦争で営利を貪る資本家・政治家達がいる」ということを。

そして、僕は、今年の6月に、戦前・戦中・戦後を従軍記者として過ごし、そして終戦の日（8月15日）に自らの戦争責任の取り方として朝日新聞社を退社したことで知られる「100歳のジャーナリスト・むのたけじ氏」が、公開講演会（コミュニティ福祉研究所主催）の中で叫んだ「今の日本は、戦前のような空気を感じるぞ!」という言葉思い出してもいた。

そして、21世紀の戦争の最前線に立たされる戦闘兵士は、軍のリクルーターの対象としてビデオゲームで洗脳された、若者の貧困・ワーキングプア層がターゲット（対象）となっているのだ。

日本では、東日本大震災（2011年3月11日）以後、心理学用語で震災等の予期せぬ悲惨な出来事から立ち直る力について災害復興支援関係者の中で「レジリエンス（resilience）」という言葉を目にするのがよくある。日本語としては「逆境力／回復力／復元力」とも訳されたりもしているものだが、近年、イラク・アフガン戦争の帰還兵の自殺問題への対応策の一つとして、アメリカ軍の戦闘兵士教育プログラムの中に、この「レジリエンス」についての教育を積極的に導入する必要性が議論されているという報道を知った。

これは、直感的に何かが違うという警鐘が僕の胸の中で鳴った。戦場で人を殺して生き延びたものの壊れた人間の心（精神）の回復力（レジリエンス）を養成することは、突き詰めれば、「戦場で人を殺しても壊れない心を作る」ことになり、

最後は、人間の心を持たない狂気の殺人マシンを作り出すことになるのではないかという予感である。

僕らは、アメリカ軍が、日夜、最新鋭の無人爆撃機（ドローン）を飛ばして、目標地点で爆弾を落としているという、まるでテレビゲーム感覚で空爆をしているという事実を知っているだろうか。基地の中で、空爆用無人機から送られてくるテレビ映像をみながら、ゲーム感覚でボタンを押し爆撃をする。しかし、爆弾を投下したその現場で一体何が起きているのかというイマジネーション（想像力）が欠如した戦闘方法もまた21世紀の戦争なのか。そして、最後は、人間的な「感情（心）と想像力（共感性）」の欠如した殺人戦闘兵士軍隊（＝究極のターミネーター軍団）が誕生する。その場所は、「愛と悲しみを喪失した世界」と呼ばれるのかもしれない。

Ⅱ. 『もうひとつの核なき世界：The Other Side of A World Without Nuclear Weapons』（小学館文庫，2014年）

次に、昨年（2014年）に加筆・文庫化された『もうひとつの核なき世界』についてもふれておきたい。僕らの多くは、「劣化ウラン」と「劣化ウラン弾」という言葉の意味の違いを知っているだろうか。

彼女の『核なき世界』の中にその説明があるので引用しておきたい。

劣化ウランとは、ウラン235の同位体存在比が天然のものより少ないものをいう。ウラン238を大量に含む原子力発電からの廃棄物だ。放射性物質なので破棄できず原発所有国にとっては長い間悩みのタネであった。アメリカ政府のこの廃棄物をどうにかして利用できないかと研究に研究を重ねてきた。その結果生まれたのが、この劣化ウランを機関砲弾にするという方法だ。

劣化ウランから成るこの弾は、分厚い戦車の鋼板を貫通し、破片を出さずにガス化する際の高熱で、戦車に乗っている兵士を即死させ、放射性ガスを放出する。処理できず持て余されていたこの＜核のゴミ＞国内蓄積量は1940年代に原爆を開発した「マンハッタン計画」以来50万トンにのぼり、加工したければエネルギー省がただ同然でいくらかでも支給してくれる状態だ。こうして、＜安い、堅い、便利＞と三拍子揃った小型破壊兵器「劣化ウラン弾」が誕生したのだった。[堤未果（2014）p. 26]

以上のように彼女は、「劣化ウラン」と「劣化ウラン弾」誕生の秘密を暴き出す。

正直、僕自身、「劣化ウラン弾」という言葉は、聞いたことがあったがそれがいかなる兵器なのか、この『核なき世界』を読むまでは全くの無知であった。そ

して、被爆国（日本）で生まれ育ち教育を受けてきたはずの自分を恥じた。

そしてさらに、この本を読みながら次々と明らかにされる。劣化ウラン弾が撒き散らす放射能を含む粉塵が、大気も含め土や水や食べ物を汚染していく環境汚染問題とその危険性や、人体に与える健康被害について、何故か公式な政府や軍からの調査研究がなされないという事実とそこに立ち塞がる「巨大な壁」があることも。

その点について、次のような彼女の記述が目にとまった。

1990年1月、今度は米軍武器弾薬化学兵器司令部が「劣化ウラン弾に関する長期戦略研究報告書」の中で、兵士が戦場で劣化ウランの粉塵を吸い込んだ場合、放射能と毒性の両方による影響が重大な問題になる可能性について警告した。劣化ウランの粉塵を吸い込む可能性があるのは、装甲貫通式武器を使用する地上部隊の兵士たちだ。こうした劣化ウランの危険性についての議論がアメリカ国内で盛り上がらなかったのは何故なのか。最大の理由は、劣化ウランとがんや白血病などの因果関係が、公式に解明されていないからだ。[堤未果（2014）pp. 27-28]

彼女は、直接、劣化ウラン弾による放射線被害での健康被害で悩む帰還兵達にインタビューを重ねていく。インタビューの中から見えてくるこの深刻な問題の本質は、たとえ訴えたとしても、劣化ウランが人間にもたらす影響についての因果関係を実証的に証明することに時間が掛かり、結局、政府は認めず、その保障は無しのままだということにあり。軍病院の医師に、いくら体調不良を訴えてもそれはストレスだと言われるばかりなのだという。そして、政府やメディアは、正確な情報を出そうとしない状況だけが続く。劣化ウラン弾による放射能汚染の実態が見えない中で、アメリカにおける劣化ウラン弾の被曝者であるということについては、誰にも言えず、「孤立感」だけが募る日々を送る帰還兵が多く、そして、自殺者も増加しているのだという。

日本においても、例え、人道的復興支援活動だったとは言えイラク任務に派遣された自衛隊員の中から、現地での事故や後遺症を負った隊員やイラクから帰国した隊員の中から30人近い自殺者が出ていることについて、どれだけの日本人は知っているだろうか。

日本は、1945年の夏、アメリカ軍によって原爆を投下された被爆国である。広島（8月6日）では8万人、長崎（8月9日）では4万人の市民が亡くなった。そして、その影響は、今日までも続いている。この2つの都市への原爆投下が実は<核実験>リスト上の<人体実験>であったこと、そして、大量破壊兵器である原爆を一般市民に向けて使用することは国際法上の<戦争犯罪>であることについてどれだけの日本人が意識していることだろうか。

彼女は、核の持つ問題の本質を執拗に問いかけて行く。僕は、『核なき世界』読みながら、1945（昭和20）年、真夏の8月15日、眩しい日差しの中に晒されているような自分を感じた。

アメリカ国民の意識調査をめぐる「（日本への）原爆投下の是非について」、この『核なき世界』の中で、次のような記載がある。

2005年。共同通信社とAP通信社は、戦後60年経った日米両国の国民意識調査を比較するため、電話方式による合同調査を実施した。それによると、1945年の広島・長崎への原爆投下について、日本では、75%が「必要なかった」と答えたのに対し、アメリカでは「戦争早期終結のためにやむを得なかった」が68%、2国間の認識の溝が浮き彫りになっている。（共同通信社、2005年7月24日）。

オバマ大統領がプラハ演説の中で<核の削減>に言及しノーベル平和賞を受賞した後も、この比率は変わっていない。

2009年8月4日キニピアック大学が発表した米国民世論調査では61%、2010年8月のラスムセン社が実施した世論調査では、59%が、「原爆投下は、良い決断だった」と答えている。[堤未果（2014）pp.66-67]

この違いは何だろう。僕自身は、太平洋戦争（第2次世界大戦）における歴史解釈の違いが「歴史教科書問題」として報道され、さまざまな見解に揺れる日本とは対照的に、戦勝国アメリカの歴史教科書には、「原爆投下」の事実については極めて肯定的な記載がなされ、その教科書でアメリカの子供達が教育されていることは以前から知ってはいた。

しかし、彼女の記述はジャーナリストとして、教育機関としての学校間及び教師間の競争原理（統一テストで点数が低い学校は補助金カットや教員の解雇）も含めて現状のアメリカにおける歴史教育が置かれている現実についてより深く切り込んで行く。僕は、読みながら、歴史教育とは常に強者の側は、「自らの正当性」をクリーンな表現で主張して描き出してみせながら、タブラ・ラサ（tabula rasa）な「何も書かれていない白紙状態にある」子どもや若者達の意識の中に意図的な刷り込みをして行くものだという意味がよく理解できる。

そして、この本の中で何度か語られる印象的なフレーズがある。

彼女から「核兵器と原発は双子の兄弟である」という事実を突き付けられて、僕は、言葉を見失った。戦時中も「必ず神風が吹くから日本は勝つ」と信じた(?)神話が大好きな日本人は、世界唯一原爆の被爆国でありながらも、戦後70年の間に何時の間にか、50基を超す原子力発電所を全国各地に設置していた。日本全土が原発という核兵器に取り囲まれている感覚に囚われて仕舞いそうだ。おそらく

様々な理由があるのだろうが、しかし、本当に何故なのかという疑問符が僕の脳裡に今も留まったままだ。そして、あの3.11の日まで、原子炉の核廃棄物処理の方法は未確立だという点は巧妙に伏せながら「原子力発電はCO₂を出さない地球環境に優しい安全でクリーンなエネルギーです」という「原発の安全神話」は、巨大地震と津波被害に合い、現在もなお危険な状況が続いている「福島第一原発事故」によってその化けの皮が剥がれたのだ。僕らの日本はまさに戦後70年前と同じ状況下にあるという現実を見つめ直す意識変革をした方が良いだろう。

正直、僕は『もうひとつの核なき世界』読みながら、彼女が提示し読み手が直面する「核をめぐるジレンマ」がもたらす「葛藤」で身体が引き裂かれそうな気分時々吐き気を感じたり、涙が出そうにもなった。換言するならば、「日本のあの日の終わりが、今日の始まり」だったのかも知れない。そして、「<世界の終わり>をもたらしないうために僕らがすべきことは何か」が今、問われている。

おわりに

僕が、ジャーナリスト堤未果氏が書いたこの2冊の本から学んだことは、この世界の事実と現実、そして真実は、誰かから、教えてもらうものなのではない。自分の手と足と頭を使い、表面に見えている世界の現象を生み出しているその背後／背景の中に隠されている「真実」は、自ら時に仲間たちと連帯しながら「調べ上げるもの、抉（えぐ）り出すもの、掴（つか）み取るもの」だということだった。

僕たち人類は、かけがえのない「宇宙船地球号」に偶然に今という時間に乗合わせた乗務員でしかない。そしてその人類には、立ち向かうべき世界の中の3つの悪を撲滅する使命（ミッション）が託されているのだと考えている。それは、「戦争と貧困と病気」というものだ。

それらの3大悪に立ち向かうために僕たちの手の中にある必要なもの、決して手放してはならないものは何か。それは、僕ら自身の<生命と希望と自由、そして未来>と呼ぶ「かけがいのないもの」だ。

そこで、この「かけがいのないもの」を手放さないために、僕たちが、やるべきことは何か。

堤未果というジャーナリストが灯すその光（真実を知る力）の意味を読み解くことから始めてはどうだろうか。それは、人間という存在それ自体が、生命の連鎖の中で託されている「バトン（使命:ミッション）の意味への問いかけ」なのかも知れないと僕は理解した。

つまり、この世界に誕生した者には、皆、何か必ず為すべき使命があり、戦争の様な人が人を殺したり、殺されたりするような時代は終わりにしてほしいと願う。人間は、誰一人として無駄な生命など無く、「世界の平和と人類の幸福のため

めにその使命を果たすべく貢献し、最後まで生ききる責任と義務」があるのだと信じている。

立教大学にとって今年のクリスマス月間の12月3日（木）の夜にジャーナリスト・堤未果氏の公開講演を聴ける機会を得ていることに心から感謝したい。

1) 今回の『書評エッセイ』は、2015年である今年の『まなびあい8号』の「特集：戦後70年」のために、ジャーナリスト・堤未果氏の著作の中から2001年9.11その後の<テロとの戦い>を掲げながら進められているアメリカ軍のイラク戦争と関連する著作の部分に焦点を当て、筆者なりのコメントを加えて書かいたものである。詳しくは、堤未果氏による今回書評エッセイで紹介した著作も含めて一連の著作（下記）も是非、この機会に、お読みいただければと思う。

『ルポ貧困大国アメリカ』（岩波新書、2007年）

『アメリカは変わるか？立ち上がる市民たち！』（大月書店、2009年）

『ルポ貧困大国アメリカⅡ』（岩波新書、2010年）

『社会の真実の見つけかた』（岩波ジュニア新書、2011年）

『政府は必ず嘘をつくーアメリカの「失われた10年」が私たちに警告すること』（角川SSC新書、2012年）

『樞貧困大国アメリカ』（岩波新書、2013年）

『沈みゆく大国 アメリカ』（集英社新書、2014年）

『沈みゆく大国 アメリカ<逃げ切れ！日本の医療>』（集英社新書、2015年）

2) デイヴィット・フィンケル（古屋美登里訳）『帰還兵はなぜ自殺するのか』亜紀書房、2015年

尚、お知らせです。下記の要領で、ジャーナリスト・堤未果氏の公開講演会が開催されます。戦後70年、今年最後の12月は、「主（イエス・キリスト）の誕生」を祝福し、「世界の平和と生命の尊厳」を考えるクリスマス月間です。立教学院の関係者のみならず、是非とも多くの方々のご参加を頂ければ幸いです。

【公開講演会】

戦後70年：今、私たちが考えるべきこと
「ワーキングプア層が支える21世紀の戦争」
～逃げ切れ！日本の若者世代～

【講師】ジャーナリスト・堤未果氏

【日時】2015年12月3日（木）・19時～20時30分

【場所】立教大学（池袋キャンパス）11号館AB01教室

【主催】立教大学・コミュニティ福祉研究所

（*予約不要・参加費無料・どなたでもご参加いただけます。）